

使用範囲から見た日中両言語の可能表現

呂 雷 寧

1. はじめに

日本語の可能表現は、中国語を母語とする日本語学習者にとって習得がかなり難しい。上級学習者でも、しばしば次のような間違いをおかす。

- (1) a. *私は勉強が進んでいないと焦れる。
b. *私は勉強が進んでいないと焦ることができる。
c. ?私は勉強が進んでいないと焦り得る。
- (2) a. *この桜は4月になると咲ける。
b. ?この桜は4月になると咲くことができる。
c. ?この桜は4月になると咲き得る。
- (3) a. *明日雨が降れる。
b. *明日雨が降ることができる。
c. ?明日雨が降り得る。

このように学習者が可能表現を過剰に使うのは日本語と中国語の可能表現の使用範囲が違うからであると考えられる。本稿では、使用範囲という面から両言語における可能表現の相違点について考察する。なお本稿では、「なぜお日様はいつも早く起きられるだろう。」のように非情物¹が擬人化されている場合の可能表現を考察の対象外とする。

¹ 宮島(1972:422)は、「<有情物>というのは、つまりほとんどは人間だが、動物も、感情や理性を持ったものとしてあつかうばあいには、ここにはいる。」と述べている。そして藤井(1971)も、人またはその他の動物を有情物とする。本稿は宮島と藤井に従い、人間や動物を有情物とし、それ以外を非情物とする。

2. 動詞の意志性と可能表現との関わり

「可能態をとることのできる動詞」は「意志的な動作を表すもの([+意志])でなければならない」と寺村(1982:262)が指摘しているように、日本語の可能表現は動詞の意志性に深く関わり、無意志動詞²は可能表現に用いられにくい。これに対して、中国語の場合は意志性による制限がほとんど見られず、無意志動詞も可能表現によく使われる。本節では、可能の意味を分類し、動詞の意志性が各種の可能表現にどのように関わっているのかについて、両言語を比較してみる。

可能の意味については、今まで多くの研究が行われてきた。そのような研究として、藤井(1971)、奥田(1986)の「能力可能・条件可能」、森田(1987)、松下(1930)の「可能の被動・価値の被動」、中田(1981)の「能力可能・許容可能・受容可能」、寺村(1982)の「能動的可能・受動的可能」、金子(1980・1981・1986)の「能力可能・認識可能」、渋谷(1986)の「動作主可能・自発(経験者可能)・認識の可能」、朱(1995)、劉(1988)、呂(1990)などが挙げられる。本稿ではこれらの先行研究を踏まえ、事態の実現に対する主体の意志的制御の度合によって、可能を能力可能、条件可能、属性可能、認識可能に4分類する。

2.1 能力可能表現

能力可能表現は、ある動作または状態を実現する能力が動作・状態の担い手にあるか否かを表す表現である。能力には本来備わった能力と習得した能力があるが、いずれもその実現が動作・状態の担い手の意志によって制御できる。したがってこの類の可能表現では、日本語でも中国語でも、動作・状態の担い手が有情物であること、そして動詞が意志動詞であることが要求される。

- (4) a. 人間は話せる動物だ。
b. 人是会说话的动物。 (作例)
- (5) a. 彼女は車が運転できる。
b. 她会开车。 (作例)

² 仁田(1988)は無意志動詞について次のように定義している。「自己制御性とは、動きの発生・過程・達成を、動きの主体が自分の意志でもって制御できるといった性質である。自己制御性を持った動詞が意志動詞であり、自己制御性を持たない動詞がいわゆる無意志動詞である。」(p.35)本稿はこの定義に従う。

これらはいずれも、意志動詞を用いて有情物の能力に関する可能を表している例である。(4)は「人間(人)」に「話す(说话)」という本来備わった能力があることを表し、(5)は「彼女(她)」に「車が運転する(开车)」という習得した能力があることを表している。

2.2 条件可能表現

条件可能表現は、ある動作または状態を成立させる動作・状態の担い手の能力が何らかの条件により、実現可能かどうかを表す表現である。条件可能表現における能力の実現は、それに適した条件下で、動作・状態の担い手の意志によって制御できる。したがって、この類の表現も能力可能表現と同様に、動作・状態の担い手に有情物を、動詞に意志動詞を必要とする。

- (6) a. 花子は今日体調が悪いので、泳げない。
 b. 花子今天身体不舒服，不能游泳。 (作例)

この(6)において問題とされているのは、「花子」の「泳ぐ(游泳)」という能力があるか否かではなく、「泳ぐ(游泳)」という能力の実現に適した条件が満たされているか否かである。そしてこの文は、「花子」が「今日体調が悪い(今天身体不舒服)」という条件下で、「泳ぐ(游泳)」という能力が実現できないことを表している。

条件可能における条件はさまざま、おおまかに内的条件と外的条件に分類できる。この内的条件と外的条件という考えは、基本的に森田(1987)の考えと一致している。内的条件可能表現は、心理的または肉体的原因によって、ある動作や状態をなすことが可能かどうかということを表す。一方、外的条件可能表現は、周囲の情勢や規則などによって、ある動作や状態をなすことが許容されるかどうかを表す表現である。上記の(6)は内的条件可能表現の例であり、下記の(7)は外的条件可能表現の例である。(6)と同様に(7)では、「花子」が「泳ぐ」という能力を有することが前提で、この能力の実現に必要な条件が満たされるかどうかの問題とされている。そして(7)は、「お父さんの許可(爸爸的准许)」という外的条件が満たされないため、「花子」の「泳ぐ(游泳)」という能力が実現できないという意味を表している。

- (7) a. 花子はお父さんの許可を得ていないので、今日は泳ぐことができない。
 b. 花子没有得到爸爸的准许，今天不能游泳。 (作例)

2.3 属性可能表現

属性可能表現とは、事物の属性が実現可能かどうかを表す表現である。本稿では、属性に、1) 事物の本来の性質、2) 機械などの性能、3) 事物に対する評価・事物の価値、の3種類があると考え。これらの属性の成立は、持ち主の意志によって制御することができない。したがって属性の持ち主は、意志のない非情物であるか、有情物であってもその意志が属性の実現可能性に関わらないものである。以下、3種類の属性可能表現が動詞の意志性にどのように関わっているのかについて、両言語を比較してみよう。

1) 事物の本来の性質に関する属性可能表現

事物に備った本来の性質は、重要な特徴として、その成立に意志的動作が関与せず、事物の内的条件が決定的な要因であるという点が挙げられる。内的条件が備わっていることを前提として、一定の外的条件が満たされれば、その性質の成立は可能となる。この場合、中国語では通常可能表現として表される。しかし日本語では、こういった属性は無意志動詞によって表されるのが通例であり、可能表現はほとんど使用されない。下に、非情物の本来の性質を表す例を挙げる。

- (8) a. この桜は4月になると*咲ける／？咲くことができる／？咲き得る。
(= (2))
b. 这里的櫻树到了4月就能开花。
- (9) a. 鉄は湿気の多い所に置かれると*錆びられる／*錆びることができる／？錆び得る。
b. 鉄放置在湿度大的地方能生锈。(作例)

(8)と(9)はそれぞれ、「桜(櫻樹)」の「咲く(开花)」という性質と、「鉄(鉄)」の「錆びる(生锈)」という性質を表す表現である。日本語ではいずれも可能表現として不適格ないし不自然であるが、中国語ではいずれも可能表現として完全に適格である。ちなみに、(8b)では「櫻樹(桜)」の「开花(咲く)」という性質が「4月になると(到了4月)」という外的条件下で成立可能であるという意味を表し、(9b)では「鉄(鉄)」の「生锈(錆びる)」という性質が「放置在湿度大的地方(湿気の多い所に置かれる)」という外的条件下で成立可能であるという意味を表している。

2) 機械などの性能に関する属性可能表現

機械などの性能に関する属性可能表現は、機械などの内的条件が備わっていることを前提として、人間の操縦などによる一定の外的条件下で、内的条件に関する事柄の実現が可能かどうかを表す。このような場合、中国語では機械の性能を表す動詞が、可能表現として用いられる。これに対して、日本語で可能表現に使われるのは、通常は有情物の意志的動作を表す動詞に限られる。

- (10) a. この起重機は6トンまで物が上げられる。
 b. 这架起重机最多能吊起6吨重的货物。 (作例)
- (11) a. この車は時速100キロで走ることができる。
 b. 这辆车时速能跑100公里。 (作例)

(10)と(11)はそれぞれ、「上げる(吊起)」と「走る(跑)」によって機械の性能を表しており、中国語でも日本語でも可能表現として成り立つ。(10)は「この起重機(这架起重机)」の「6トンまで物が上げられる(最多能吊起6吨重的货物)」という性能を表し、(11)は「この車(这辆车)」の「時速100キロで走ることができる(时速能跑100公里)」という性能を表している。これらの性能はいずれも人間の操縦によって具現化される。

(10)や(11)におけるように動作の担い手が非情物である場合に意志性が表出しないのは当然であるが、「上げる」や「走る」といった動詞は意志動詞として有情物の意志的動作を表すのが普通である。そして、このような動詞は日本語では可能表現になりやすい。

一方、通常は無意志動詞として使われる動詞が次のように、日本語では可能表現になりにくい。

- (12) a. このカメラは性能がよくて、人がはつきり写る／*写れる／*写ることができる／?写り得る。
 b. 这架照相机性能不错，能把人物拍得很清楚。 (作例)

(12)では、動詞「写る(拍)」によって「このカメラ(这架照相机)」の性能を表している。「写る」は無意志動詞としてしか使われない動詞であるが、このような場合でも、それに対応する中国語では可能表現が成立する。

3) 事物に対する評価・事物の価値に関する属性可能表現

人間は常に、自分の立場から身の周りにある事物を評価したり、自分の需要によって価値判断をしたりする傾向がある。本稿では、事物に対する評価と事物の価値を、人間の立場から賦与された、事物の有する一種の属性と考える。この属性は人間の立場からの評価、人間にとっての価値であるため、常に人間の意志的動作を表す動詞、つまり意志動詞によって表される。このような属性に関する可能表現は日本語でも中国語でも成り立つ。下に、人間の意志的動作によって事物の属性を表している例を挙げる。

- (13) a. この川は汚くて泳げない。
b. 这条河太脏不能游泳。 (作例)
- (14) a. この茸は食べられる。
b. 这种蘑菇能吃。 (作例)

(13)では、「この川(这条河)」が人にとって「泳げる(能游泳)」という価値を持っていないという意味を表している。(14)では、「この茸(这种蘑菇)」が人にとって「食べられる(能吃)」という価値を有するという意味を表している。これらの属性はそれぞれ人間の意志的動作「泳ぐ(游泳)」、「食べる(吃)」によって表されるので、日本語でも可能表現が成り立つと考えられる。

2.4 認識可能表現

認識可能表現というのは、金子(1980)の「認識の可能」に従い、ある事柄の成立が可能かどうかという認識上の可能性を表す表現である。この類の表現は事柄が成立する可能性の有無に対する話者の判断を表す。動作・状態の担い手はたいてい非情物である。たとえ有情物であっても、その意志性が表出しない。無意志動詞によって表されるこの種の可能表現は、中国語には多いが、日本語には少ない。

- (15) a. クビになりえない人が弾劾裁判にかけられるんです。 (金子1980:67)
b. 不会被解雇的人将受到弹劾审判。

金子(1980)によれば、日本語の認識可能は「得る」によって表される。しかし、「得る」は認識可能を表す場合、「あり得る」、「起こり得る」などのような決まった言い方以外、ほとんど使われない。そして、これらの言い方は「文語的な文脈に限定されている」(寺村

1982:270)。渋谷(1986:107-108)も、「得る」は標準語において「生産性を持たないうえに、文章語的なニュアンスを持つ」とし、認識可能は「標準語における位置は極めて周辺的である」と指摘している。

一方、中国語の認識可能表現は、次の例からも分かるように、決して周辺的ではない。

- (16) a. ?明日雨が降り得る。
b. 明天会下雨。 (作例)
- (17) a. ?栄養に気を付けないと体が壊れ得るよ。
b. 不注意营养身体会垮的。 (作例)

(16b)は話者の判断により、「下雨(雨が降る)」という自然現象が起こる可能性があることを表し、(17b)は話者の判断により、「身体垮(体が壊れる)」の可能性のあることを表している。このような表現は中国語には多く見られる。

以上で述べたように、日本語の可能表現は動詞の意志性に深く関わっているのに対して、中国語の場合には動詞の意志性による制限がほとんど見られない。本節で日中両言語の可能表現について述べたことをまとめると、次のようになる。

日本語

①意志動詞の可能表現が主流である。

このような可能表現には、能力可能表現、条件可能表現、事物に対する評価と事物の価値を表す属性可能表現、機械などの性能に関する属性可能表現の一部(通常意志動詞として使われる動詞によって表されるもの)がある。

②無意志動詞の可能表現は周辺的である。

- 1) 事物に備わった本来的性質に関する表現はほとんど無意志動詞によるものであり、可能表現にはなりにくい。
- 2) 機械などの性能を表す無意志動詞表現は、可能表現にはなりにくい。
- 3) 認識可能表現は無意志動詞と「得る」によって表され、文語的で、使用頻度が低い。

中国語

意志性にほとんど関わりなく、可能表現が使用される。無意志動詞を用いる可能表現、つまり属性可能表現と認識可能表現も使用頻度が高い。

3. 可能表現の表す事態の性質

日本語の可能表現は、認識可能表現は別にして、³ 望ましい事態を表す傾向がある。望ましい事態とは、動作・状態の担い手の希望、あるいは話者などの期待が込められる事態のことであるが、中国語の場合には事態の性質による制限があまり見られず、望ましくない事態を表す可能表現も多く存在している。以下では、動作・状態の担い手の希望が込められた場合、話者などの期待が込められた場合との2つに分けて、日本語の可能表現が望ましいコンテキストにおいて成立しやすいこと、そして中国語の可能表現は事態の性質に左右されないことについて論じる。

3.1 動作・状態の担い手の希望が込められた場合

森田(1987:478-479)は、「<可能>は<希望>の結論として存在し“……したい”→“することができる”と意志的にとらえるところに特色がある」として、日本語の可能を動作・状態の担い手の希望の実現の可能としている。森田のこの考えは、動作・状態の担い手が有情物である場合に当てはまると思われる。

森田(1987)によれば、日本語における有情物の可能表現の多くは、動作・状態の担い手にとって望ましいことを表す意志動詞の可能表現である。したがって、動作・状態の担い手にとって悪い結果をもたらす、本人が当然避けようとする動作・状態を表す動詞あるいは無意志動詞は可能表現になりにくいと考えられる。このことを、例文を挙げて確認してみよう。

次の(18)における可能の成立は、動作の担い手にとって望ましいことである。したがって、中国語のみならず日本語においても可能表現が成立する。

- (18) a. あの子は百まで数えられる。
b. 那个孩子数数能数到一百。 (作例)

(18)では、「百まで数える(数到一百)」ということが可能かどうかの問題とされている。しかし、まず、「数える(数数)」という動作の担い手である「あの子(那个孩子)」に「数えたい(想数)」という希望がなければ、「百まで数える(数到一百)」ということが可能かどうかを述べることができない。「百まで数えられる(数数能数到一百)」ということは「あの子

³ 認識可能表現は望ましくない事態を表す場合もあり得るが、第2節で述べたようにかなり周延的で問題にならないため、この節で考察の対象から外す。

(那个孩子)」の能力であり、「あの子(那个孩子)」にとって望ましいことでもあると考えられる。

動作・状態の担い手が有情物である場合、担い手の希望は、しばしば話者の希望でもある。それは、担い手と話者が同じ有情物である場合、あるいは、担い手が人間一般で話者もその中に含まれている場合などである。

- (19) a. 医者の許可がないと、私は好きなものも食べられない。
 b. 没有医生的许可，我连爱吃的东西都不能吃。 (作例)
- (20) a. この川は汚くて泳げない。
 b. 这条河太脏不能游泳。 (= (13))

(19)における「食べる(吃)」の担い手は話者で、(20)における「泳ぐ(游泳)」の担い手は話者を含む人間一般であると考えられる。「好きなもの」を「食べる」(吃爱吃的东西)ということの成立は「私(我)」にとって望ましいことであるので、(19)には、担い手(=話者)である「私(我)」の「好きなものが食べたい(想吃爱吃的东西)」という希望が込められていると考えられる。同様に、「この川(这条河)」で「泳ぐ(游泳)」ということの成立は話者を含む人間一般にとって望ましいことであるので、(20)には、話者を含む人間一般の「泳ぎたい」→「この川は泳ぐのに相応しい状態であってほしい」という希望が読み取れる。このように動作・状態の担い手にとって望ましい事態を表す動詞は日本語と中国語の双方において同じ程度に可能表現になりやすい。

次に、動作・状態の担い手にとって望ましくないことを表す例を見てみよう。

- (21) a. 私は勉強が進んでいないと*焦れる／*焦ることができる。 (= (1))
 b. 我学习没有进展就会着急。

「焦る」は無意志動詞であるうえ、普通はマイナス⁴の心理現象を表すため、(21a)の「焦る」は可能表現にすることができない。次の例では「焦る」が可能表現として使われて

⁴ 宮島(1972:492)は、「ひろい意味で『評価』に関係のある動詞には、いろいろな種類がある」としている。宮島により、「評価」に関係のある動詞を大まかに分類すれば、「いらっしゃる」「さしあげる」のように動作の主体や相手に対する敬意を表すもの、「なおる」や「ゆがむ」のように変化の結果に対する評価を表すもの、「でっちあげる」「かおる」のように動作・状態自体に対する評価を表すものという3種類がある。本稿では、このように広い意味で良い評価を伴う動詞をプラスの意味を含む動詞と称し、悪い評価を伴う動詞をマイナスの意味を含む動詞と称する。そして評価を伴わない動詞と悪い評価を伴う動詞を合わせてプラスの意味を含まない動詞と称する。

呂 雷寧

いるけれども、これは望ましいことを表すコンテキストにおける使用例であると見なさなければならぬ。

- (22) a. 大学の友達と一緒に勉強することで、自分はどれぐらい勉強が進んでいるか把握していました。なぜなら、皆と比べて勉強が進んでいないのが分かることで「勉強しなければいけない」と焦ることができるからです。

(<http://www.asahi-net.or.jp/~zi8y-SD/csw3/taikenki16-15.html>)

- b. (以前总是)通过跟大学的朋友一起学习来掌握自己的进展情况。因为与大家比较发现自己没有进展以后，就能着急起来，知道“非学习不可”了。

(22a)における「焦る」はマイナスの意味が失われ、プラスの意味を表していると考えられる。勉強のことで焦ることは「焦る」という心理状態の担い手にとって望ましいことであり、その成立には状態の担い手の希望が込められていると見なすことができる。こういうコンテキストにおいては、「焦る」のような動詞でも可能表現になりやすくなる。しかし、(21b)と(22b)から分かるように、中国語の場合には、「着急（焦る）」はマイナスの意味が保たれるか否かに関わらず、可能表現に用いられる。

続いて、「驚く」のような、マイナスの意味を含むかどうかははっきり判断できない動詞について考えてみよう。この類の動詞も下記の(23)のように、平叙文においては中国語では可能表現になれるが、日本語では普通可能表現にすることができない。

- (23) a. 彼はいろんなことに*驚ける／*驚くことができる人だ。
b. 他是对很多事情都能惊讶的人。

しかし、(23a)を(24a)のような望ましいコンテキストに変えると、「驚く」は可能表現になりやすくなる。

- (24) a. 新聞記者は、人が知らない事実や真実に光を当て皆に伝えるのが仕事だ。そういう仕事には、どういう人が求められているのだろうか。第一に、好奇心が旺盛であることだ。いろんな発見に喜びを感じ、驚くことができる人だ。
b. 新闻记者的工作是曝光并传达人们所不知道的事实。什么样的人适合这种工作呢?第一、必须是好奇心旺盛，能对各种发现高兴、惊讶的人。

(作例)

(24a)においては、「驚く」ことは新聞記者にとって望ましいことで、その成立には新聞記者や新聞記者になりたい人などの希望が込められている。(24a)が日本語の可能表現として成り立つのはそのためである。

以上から分かるように、中国語の可能表現は事態に対する評価に関わりなく使用される。一方、日本語では有情物の動作・状態に関する可能表現は望ましいことを表す傾向が強い。

3.2 話者などの期待が込められた場合

日本語の可能表現は、動作・状態の担い手が非情物である場合でも、あるいは意志性の表出できない有情物である場合でも、望ましいことを表す傾向が強い。こういう場合の事態は話者などにとって望ましいことで、その成立にはしばしば話者などの期待が込められる。次はそのような例である。

- (25) a. この起重機は6トンまで物が上げられる。
 b. 这架起重机最多能吊起6吨重的货物。 (= (10))

(25)は、機械としての「この起重機(这架起重机)」の性能に関する可能表現である。「この起重機(这架起重机)」の「6トンまで物を上げる(最多吊起6吨重的货物)」という性能の成立は人間一般にとって望ましいことであり、それには話者を含む人間一般の期待が込められていると考えられる。

ところで、(25)における「上げる」を可能表現として使用できるのは、それが通常は有情物の意志的行為を表す動詞だからである。動作の担い手が非情物である場合、(25)のような機械の性能を述べる時は別にして、ほとんど無意志動詞によって表され、可能表現になりにくい。しかし、望ましいコンテキストにおいては可能表現になりやすくなる。これは日本語の可能表現が望ましいことを表すということの裏づけになると言えよう。このことを説明するため、さらに次の例を挙げる。

- (26) a. この桜は4月になると*咲ける／?咲くことができる。
 b. 这里的樱树到了4月就能开花。 (= (8))

(26a)において、非情物「桜」の「咲く」という性質は可能表現によって表しにくい。しかし、下記の(27a)のようなコンテキストになると、無意志動詞「咲く」は「ことができる」と共起して、可能表現として成り立つ。

- (27) a. 温帯性の植物である桜は亜熱帯地域では気温が20度を少し下回ってようやく咲くことができる。(www.nhk.or.jp/sawayaka/ishigaki.html)
b. 温帯植物櫻樹在亞熱帶地區溫度達到20度以後才能開花。

(27a)は(26a)と同様に「桜」の「咲く」という性質を表しているが、「ようやく」という語句から、その性質の成立が話者に期待されているというニュアンスが読み取れる。このようなコンテキストにおいては、無意志動詞「咲く」は可能表現に使われやすくなる。また、(26b)と(27b)はともに可能表現として成り立つので、中国語の可能表現はコンテキストが望ましいか否かに関わらないと言うことができる。このことは、次の例によっても検証できる。

- (28) a. このあたりの米は一週間すれば*実れる／？実ることができる。
b. 这一帶的稻子一个周后就能結粒。
(29) a. 庄内平野は、日本海側なので「ヤマセ」で冷害が起きることがありません。そのうえ、イネの「いなほ」が出てから実るまでの間(おいしいお米をとるのに一番大切な時期)に晴れている日が多いので、お米はしっかりと実ることができます。(http://www.agrin.jp/hp/q_and_a/shonai_heiya.htm)
b. 庄内平原位于日本海一侧，不会受到“山背风”的冻害。而且，稻穗长出以后至結粒期間(收获味美稻米的最关键时期)晴天很多，所以稻子能結粒饱满。

日本語において、上記の「咲く」と「実る」は社会通念的に見れば、ともにプラスの意味を帯びていると考えられる。このような無意志動詞は、望ましいコンテキストでは可能表現としての容認度が高くなる。

一方、社会通念的に見ればマイナスの意味を表す動詞は、可能表現になりにくい。これも、日本語の可能表現は望ましいことを表す傾向があるということの裏づけになると考えられる。例えば「散る」、「錆びる」は非情物のマイナスの属性を表すため、(30a)、(31a)のように可能表現として使われにくい。しかし中国語では、この場合にも(30b)、(31b)は可能表現が成立する。

- (30) a. 桜は一週間も経たないうちに*散れる／*散ることができる。
b. 櫻花不到一个星期就会謝。
(31) a. 鉄は一定の条件下で*錆びれる／*錆びることができる。

b. 鉄在一定的条件下会生锈。

このように「散る」と「錆びる」が可能表現にできないのは、望ましいことを表すコンテキストをそれらの動詞によって想定することが難しいからである。

4. おわりに

本稿は使用範囲から日中両言語の可能表現について比較してみた。その結果、動詞の意志性と事柄の性質が両言語の可能表現における違いを生む重要な要因であることが分かった。

中国語の可能表現には、動詞の意志性と事柄の性質による制限がほとんど見られない。無意志動詞も可能表現に多く用いられ、また望ましくないことを表す可能表現も多く存在する。そして、非情物や無意志動詞に関する可能表現も多用される。

これに対して日本語の可能表現は、意志動詞が用いられやすく、動作・状態の担い手や話者などにとって望ましいことを表す傾向が強い。そのため、有情物の意志的動作に関する可能表現が主流であり、非情物や無意志的動作に関する可能表現は周縁的である。

参考文献

- 青木ひろみ(1997) 「自動詞における「可能」の表現形式と意味—コントロールの概念と主体の意志性—」『日本語教育』93号 日本語教育学会 pp. 97-107
- 荒川清秀(2003) 『一步すすんだ中国語文法』大修館書店
- 王 力(1985) 『王力文集』第三卷 山東教育出版社
- 大河内康憲(1980) 「中国語の可能表現」『日本語教育』41 日本語教育学会 pp. 61-73
- 奥田靖雄(1986) 「現実・可能・必然」(上)『ことばの科学』1 言語学研究会編 むぎ書房 pp. 181-212
- 金子尚一(1980) 「可能表現の形式と意味(I)—“力の可能”と“認識の可能”について—」『共立女子短期大学紀要(文科)』第23号 pp. 62-76

- (1981) 「能力可能と認識可能をめぐって—非情物主語ということ—」『教育国語』65 pp. 103-112
- (1986) 「日本語の可能表現<現代語>—標準語のばあい—」『国文学解釈と鑑賞』51(1) 至文堂 pp. 74-90
- 佐々木正人(1994) 『アフォーダンス:新しい認知の理論』 岩波書店
- (1997) 『アフォーダンス』 青土社
- (2001) 『アフォーダンスと行為』 金子書房
- 渋谷勝己(1986) 「可能表現の発展・素描」『大阪大学日本学報』5 pp. 101-136
- 朱 徳熙(1995) 『文法講義—朱徳熙教授の中国語文法要説—』 杉村博文、木村英樹訳 白帝社
- 寺村秀夫(1982) 『日本語のシンタクスと意味』I くろしお出版
- 中田敏夫(1981) 「静岡県大井川流域方言におけるサル形動詞」『都大論究』18 東京都立大学国語国文学会 pp. 1-13
- 藤井 正(1971) 『日本文法大辞典』 松村明編 明治書院
- 松下大三郎(1930) 『標準日本口語法』 中文館書店(1977年に勉誠社より復刊)
- 宮島達夫(1972) 『動詞の意味用法の記述的研究』 国立国語研究所 秀英出版
- 森田良行(1987) 『角川小辞典7 基礎日本語 I』 角川書店
- 劉月華他(1988) 『現代中国語文法総覧』 片山博美、守屋弘則、平井和之訳 くろしお出版
- 呂 叔湘(1990) 『呂叔湘文集』 商務印書館
- 呂 雷寧(2005) 『現代日本語における可能表現の研究』 名古屋大学国際言語文化研究科修士論文

例文出典

検索エンジン(検索期間:2004年4月1日~12月31日)

goo(<http://www.goo.ne.jp/>)

Google(<http://www.google.co.jp/>)